

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年5月7日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520024
研究課題名（和文） 新たな身体の哲学の構築に向けた国際的研究——メルロ＝ポンティ生誕100年に際して
研究課題名（英文） International Research for the Construction of New Philosophy of Body, the 100th Anniversary of Merleau-Ponty
研究代表者
松葉 祥一（MATSUBA SHOICHI）
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号：00295768

研究成果の概要：

本研究の目的は、2008年に生誕100年を迎えるモーリス・メルロ＝ポンティの哲学とくにその身体論に焦点をあて、これまでの研究を総括するとともに、新たな展開の可能性を探究することにある。彼の身体論は、哲学にとどまらず、社会学、精神医学、心理学、美学、教育学、看護学などの分野に刺激を与えてきた。近年さらに認知科学や脳科学、ロボット工学などの分野にも影響を与えている。そこで本研究では、2008年11月25・26日立教大学における国際シンポジウムを始め講演会や研究会、書籍などを通じて、こうした彼の身体論研究の深まりと広がりを総括し、新たな発展のための基盤を築いた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：西洋・倫理学

キーワード：哲学、フランス哲学、現象学、身体論、心理学、美学、認知科学、看護学

1. 研究開始当初の背景

メルロ＝ポンティの身体論は、これまで、現象学や哲学にとどまらず、社会学、文化人類学、精神医学、心理学、美学、言語学、教育学、看護学など、幅広い分野に刺激を与え、研究されてきた。近年ではさらに、認知科学やコンピュータ科学、脳科学、ロボット工学の分野でも重要な参照系となっている。とくに、ここ10年、フランスやベルギーなどのフランス語圏をはじめとして、イギリスやアメリカ、カナダなどの英語圏でも、優れた中堅、若手の研究者による新たなメルロ＝ポンティ解釈が相次いで発表されており、その身体論研究は新たな展開を見せ始めている。

しかし、このような多様な領域におけるメルロ＝ポンティの身体論の影響と深まりを概括する機会はこれまでなかった。

本研究は、メルロ＝ポンティ生誕100年に際して、こうした領域の研究者を招いて、研究討議やシンポジウムの開催、著作や雑誌の共同編集などを行い、メルロ＝ポンティの身体論にかんする総括的な研究を行うと同時に、相互刺激による新たな発展の可能性を探り、その成果を広く公開することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、哲学だけでなく様々な分野でのメルロ＝ポンティに関する最新の研究動向を明らかにすること、第二にこうした各分野での展開を総括する哲学的視点を提案すること、第三にこの総括的視点に立って、また各分野での展開の相互刺激によって、新たな「身体の哲学」の構築を目指すことにある。メルロ＝ポンティの身体論は様々な分野で研究されているが、それらの成果を総括する視点が待たれている。新たな「身体の哲学」の構築は、身体論に関心をもつさまざまな分野に刺激を与えるであろう。

こうした目的を達成するために、メルロ＝ポンティの身体論の影響域を、次の二つの焦点にしばった。

(1) ヨーロッパにおけるモーリス・メルロ＝ポンティ研究の動向。すなわち、R. Barbaras、M. Carbonne、M. Richir、E. de Saint Aubert、J.-M. Treguier、F. Dastur、J. Rogozinski、S. Menase、F. Wormsらによって展開されている新たなメルロ＝ポンティ研究、とくにその身体論を検討し、存在論、他者論、知覚論、政治理論、および芸術論におけるその意義を探ること。

フランスやイタリアを中心とするヨーロッパの研究者にとって、メルロ＝ポンティの思想は、形而上学や現象学の伝統と、構造主義以後の現代哲学の交差点として重要な意

味をもっており、同地のメルロ＝ポンティ研究者組織「メルロ＝ポンティ協会」は活発に活動を続けており、機関誌 *Chiasmi international* もすでに10号を重ねている(研究代表者松葉と連携研究者廣瀬はこの雑誌に編集委員として参加している)。

すなわち一方で、フランス哲学には形而上学の伝統、およびメヌ・ド・ビランからベルクソンに至る身体論の伝統があり、メルロ＝ポンティの思想はこの両方にとって大きな意味をもっている。この伝統に則ったメルロ＝ポンティ読解は、非常に精緻な議論を展開してきたが、ともすると文献研究に終始し、新たな展開を生みにくい。本研究は、こうした古典的伝統と、英米の認知哲学などの新たな応用的な研究とを融合させることによって、新たな展開を目指すものである。

他方で、フランス哲学には、狭い意味での哲学的問題だけでなく、同時代の他の科学や社会が直面する諸問題と取り組んできた伝統がある。この点でもメルロ＝ポンティの思想が果たす役割は大きい。例えば、ジャン＝リュック・ナンシーは、ヨーロッパにおける共同体論の原型であるキリスト教の〈身体〉に基づく共同体論を換骨奪胎しながら、現代における共同〈体〉論を展開している。こうした議論は、メルロ＝ポンティの身体論の批判的継承であり、その新たな展開であると言える。

そこで本研究では、E. de Saint Aubert や M. Carbonne、J. Rogozinski ら比較的若い世代の研究者を招き、英米圏の議論ともつき合わせることによって、現代のテクノロジー社会における身体の問題や、現代アートにおける身体の問題など、様々な問題を討議し、大陸的な伝統をより実証的な場へと応用することを目指すとともに、英米系の議論に、哲学的により精緻な次元を導入しようとするものである。

(2) 心の科学における身体の問題性とメルロ＝ポンティの受容を明らかにすること。またそれにあわせて、心理学・認知科学、脳科学、ロボット工学などの心の科学、また看護学、精神病理学、発達障害の療育などの臨床心理学、教育心理学などの分野において、メルロ＝ポンティの思想がどのように受容され、展開されているかを、E. Thompson、J. Morley、A. Noe、D. Jopling など海外の研究者、および認知科学やロボット工学などを専門とする国内の研究者を交えて考察し、この分野の将来的展望を描くこと。

英米圏では、設立以来31年を迎えるアメリカの「メルロ＝ポンティ・サークル」を中心に、現象学的、哲学的視点からの研究が進められている一方で、北米の分析・言語哲学

の伝統においては、近年、ますます「心の哲学」に研究の重心が置かれつつあるが、そこにおける現象学的身体論への関心は本格的なものである。とくに、故フランシスコ・ヴァレラやエヴァン・トンプソンの研究を通して、メルロ＝ポンティの身体論は研究者の関心の中心にあると言ってよい。

また、認知科学者ウィノグラードやギブソニアン・アプローチを取る生態学的心理学者の影響を通して、認知科学やコンピュータ科学、ロボット工学においてもメルロ＝ポンティの哲学は強い関心の対象になっている。本研究は、これらの「心の哲学」および「心の科学」における身体論の意義を、メルロ＝ポンティ研究に立ち返りながら検証し、これらの分野へのさらなる寄与の可能性を探ろうとするものである。

この二つの視点に、必然的に、日本におけるメルロ＝ポンティ研究の展開、および身体論の新たな展開が配置されることになる。例えば、日本の教育学では子どもの学習に「知的理解」だけでなく「身体的理解」が必要であることが強調され、身体論の重要性がとみに増している。また、認知科学やロボット工学では独自の身体論の展開がみられる。

また本研究は、副次的にメルロ＝ポンティ研究に関する国際的な相互刺激と交流を促すことができた。これまで、メルロ＝ポンティ研究者相互の交流は、個別的なものであったが、一同に会することによって、今後より活発で組織的な研究の発展が期待できる。現在、メルロ＝ポンティに限定した研究団体として、ヨーロッパの「国際メルロ＝ポンティ協会」、アメリカの「国際メルロ＝ポンティ・サークル」、日本の「日本メルロ＝ポンティ・サークル」、台湾の「メルロ＝ポンティ学会」などが存在するが、これまでは相互の交流は活発だとはいえない状況であった。この機会を通じて、世界規模での協力体制を構築する第一歩をしるすことができた。

3. 研究の方法

メルロ＝ポンティの哲学、とくにその身体論に関して、最先端の研究を展開している海外の研究者を招聘して、共同研究と国際シンポジウムの実施、著作や雑誌の共同編集などを行った。そのために、研究代表者と連携研究者は共同して、講演会や国際シンポジウム、講演会を開催した。またそれ以外にも個々に、研究者向けの共同研究会において海外の招聘研究者とともに研究を発表するとともに共同討議に参加し、その成果を著作や雑誌の形にまとめた。

(1) 2007年度には、第一回会議（2008年3月29日、東京電機大学）、G. Hiltman氏講演

会（2008年8月12日、ウイングス京都）、F. Worms氏講演（2008年10月19日、京都日仏学館）、シンポジウム「メルロ＝ポンティと美的なもの」（2008年9月17日、玉川大学）を開催した。

また個別研究として松葉は、メルロ＝ポンティの身体論に基づいた共同<体>論の可能性を探究した。メルロ＝ポンティの共同体論は、間身体性の概念のなかに自他の区別を解消してしまう一元論であるという批判が一般的である。しかし、中期の政治論や晩年のマルクス講義では、肉や褻の概念のなかに共同性と差異性を同時に見出そうとしている。この視点は、個人とその自由を前提にした自由主義が称揚される現在、重要な意味をもつ。しかし、この視点は共同体主義に結びつくわけではまったくなく、むしろジャン＝リュック・ナンシーやアルフォンソ・リンギスの共同体論のなかにその継承を見出すことができる。また渡欧して国際シンポジウム参加予定者への出席依頼と予備討議を行った。

河野は、メルロ＝ポンティの身体論・知覚論を、心の哲学や認知哲学、さらには、近年のコンピュータ科学や脳生理学の成果の文脈の中で解釈し、その接点と共同展開の可能性を模索した。コネクショニズム以降の認知科学・心理学の新しい動向、とくにギブソンの生態学的心理学とメルロ＝ポンティの身体論を関連づけ、生態学的身体論の立場を確立することを目指した。生態学的身体論の適用により、従来、根本的にはデカルト的枠組みから脱却できていなかった認知科学や心理学の対人関係論・自己論に対して、他者認知の身体性、自他の循環的な自己創出的関係性、自己形成や自己認識の他者媒介性などの観点を導入することを試みた。河野は、国際シンポジウムにおいて発表および討議に参加するとともに、論文や著書の形で公開した。

廣瀬はメルロ＝ポンティの制度化概念についての学位論文を延長し、構造主義以降の議論を踏まえ、現象学がどこまで無意識やテクノロジーの問題を論じることができるのかを集中的に研究し、それを現代の新たな身体論に応用することを目指した。

加國は、後期メルロ＝ポンティにおける存在論と言語、とりわけ文学の言語との関係を考察する。後期のメルロ＝ポンティが、プルースト、クローデル、シモンの著作に問いかけながら、彼自身の存在論の「ロゴス」と呼ぶものを、これらの文学のなかの思考に求めていたことを明らかにすることによって、存在論的哲学と二十世紀の文学の交錯する地点に、哲学の言語の新しい可能性が開かれていたことを提示した。

本郷は、メルロ＝ポンティ哲学における身

体と芸術との相関を存在の次元から探る。現代芸術において、際だった意味を持つようになった身体性の問題を、実際の作品分析と付き合わせる形で検討し、メルロ＝ポンティ身体論の射程を探ることを主眼とした。

村上は、小児科でのフィールドワークや精神科医との共同研究を通して、身体論と精神病理学の観点からメルロ＝ポンティの新しい読解の可能性を探る。その際は特に初期の心理学に依拠した一連の論考を参考にする。またメヌ・ド・ピランなど近代フランス哲学との関連、およびレヴィナスなどの同時代の哲学者との関連の中でメルロ＝ポンティを思想的に位置づけ直す作業を試みた。

(2)2008年度には、Weiss氏講演会(2008年11月20日、立教大学)。コロキウム「神経科学と哲学」(2008年11月20日、東京大学)。J. Rogozinski講演会(2008年11月21日、慶應大学)。国際シンポジウム「新たな身体の哲学の構築に向けた国際的研究」(2008年11月22・23日、立教大学)、国際シンポジウム「メルロ＝ポンティと現象学」(2008年11月25日、立命館大学)。J. Rogozinski氏講演会(2008年11月27日、大阪大学)、総括会議(2009年3月21日、東京電機大学)を開催した。

このうちとくにメルロ＝ポンティ生誕100年国際シンポジウムは、この本研究の総括ともいえるものであり、日、仏、米、英、伊、中から15名の研究者を招いて、メルロ＝ポンティの身体論をめぐって討議した。

11月22日は、「歴史と自然のキアスムとしての身体」と題して、主にメルロ＝ポンティの身体論研究の深まりについて討議した。午前中のシンポジウム1「自然と身体」は、司会を加賀野井秀一(中央大学)が務め、加國尚志(立命館大学)による「表象の彼方の身体—メルロ＝ポンティにおける身体と絵画の理論」、E・ドゥ・サントペール(フランス国立科学センター、パリ高等師範学校、フッサール文庫)による「『肉は鏡の現象である』—誤解されている命題の出典と意味」、および劉國英(香港中文大学)による「フッサールの影に対峙するメルロ＝ポンティとフィンク」の発表と討議。

午後のシンポジウム2は、「歴史と身体」と題して司会を増田一夫(東京大学)が務め、廣瀬浩司(筑波大学)による「身体の歴史的制度化」、M・カルボーネ(ミラノ大学)による「野生になるには多くの時間が必要だ—メルロ＝ポンティによるゴーギャン、ゴーギャンによるメルロ＝ポンティ」、松葉祥一(神戸市看護大学)による「身体、コミュニオン、コミュニティ」、J・ロゴザンスキー(ストラスブルグ大学)による「キアスムと可逆性」

の発表と討議が行われた。

11月23日は、「知覚する身体の広がり」と題して、主にメルロ＝ポンティの身体論の広がりについて討議した。午前中のシンポジウム3は、「ケアする身体」と題され、司会を、嘉指信雄(神戸大学)が務め、J・コール(ボーンマス大学)による「変異した身体性—神経学的障害とメルロ＝ポンティ」、G・ワイス(ジョージ・ワシントン大学)による「障害と加齢の「正常な異常性」—メルロ＝ポンティとボーヴォワール」、西村ユミ(大阪大学)による「看護師の身体と経験の現象学—永続的植物状態患者との相互作用を通じたコミュニケーションの可能性」、河野哲也(立教大学)による「憑依(私における他者の身体化)と道徳性」の発表と討議が行われた。

午後のシンポジウム4は「拡張する身体」と題され、司会を村田純一(東京大学)が務め、S・ギャラガー(セントラルフロリダ大学、ハートフォードシャー大学)による「間身体性と間主観性—メルロ＝ポンティと「心の理論」説の批判」、M・ツァキリス(ロンドン・ロイヤル・ホロウェイ大学)による「身体性の神経現象学—行為者性と身体所有性の間の相互作用」、岡田美智男(豊橋技術科学大学)による「人間—ロボットの相互作用とコミュニケーションにおける身体性」、長滝祥司(中京大学)による「心、身体性、二人称の観点」の発表と討議が行われた。

これらの発表の予稿はホームページ上<http://homepage3.nifty.com/mpc/icmpcj.html>で公開された。また会場では発表の欧文と和訳の報告集が配布され、シンポジウム後には写真等を含めたCD-ROMが作成され、関係者に配布された。また、発表の大半が雑誌の特集号として公刊された(『現代思想』総特集メルロ＝ポンティ、2008年12月)。

他に個別的な研究として、松葉はメルロ＝ポンティの歴史理論にまで展開した。また他方で、アメリカを中心に広く行われている、看護領域における現象学的研究方法の可能性を、とくにメルロ＝ポンティの身体論の視点から探った。そのために、ソウル市において現象学的看護研究を理論的に基礎づけようとしているナミン・リー氏(ソウル大学)らと討議した。また、ホーチミン市において、ホーチミン市社会・人文大学で「メルロ＝ポンティの現象学の射程」と題する講演を行うとともに、同大学の研究者と討議を行い、メルロ＝ポンティと親交のあったトラン・デュク・タオについての調査を行った。

河野は、社会制度論や権力論における生態学的身体論の射程を探った。とくに、メルロ＝ポンティ身体論と生態学的心理学の観点を融合させ、技術論・テクノロジー論・人工身

体論に新しい視座を打ち立てることを目指した。

廣瀬は2007年度の研究を、社会的次元にまで延長し、フーコー以降の身体の社会的性格とメルロ＝ポンティの身体論をどのように統合できるかを研究した。そのうえでメルロ＝ポンティの自然概念の身体論的な意義を再評価する道を探った。

加國は、マルディネやデュフレンヌらの芸術哲学とメルロ＝ポンティの哲学との比較考察などに取り組み、またヴァレリーの思想とメルロ＝ポンティの哲学との比較考察などに取り組んだ。

本郷は、アルンハイムの芸術心理学から近年の視覚理論、アフォーダンスの理論などとの関係を考察し、引き続きメルロ＝ポンティの藝術論の射程を探りつつ、そこから存在論への道を探った。

村上は、引き続き精神病理学・発達障害の療育における方法論的な骨子という観点からメルロ＝ポンティの読解をおこなった。また引き続き近代フランス哲学や現代フランス哲学の中での位置づけの作業も行った。2008年度には、共同研究会および国際シンポジウムで、本研究成果を公表し、海外からの研究者と討議を行った。

4. 研究の成果

現在、メルロ＝ポンティの身体論についての研究、およびそこから発展した身体に関する研究は、社会学、心理学、美学、言語学、認知科学、ロボット工学、精神医学、看護学、教育学など幅広い分野で展開されている。こうした多様な展開は、学問の進展にとって歓迎すべきことであるが、他方でさらなる展開のためには、これらの分野の見解を総括し、「身体とは人間にとって何か」、あるいは「身体をもつ人間とは何か」という総合的な観点をもたらす必要があるだろう。こうした総合的な視点を提示することこそ、哲学の役割である。しかし、これまでこのような試みは部分的なものにとどまっていた。そこで、本研究は、エドムント・フッサールが目指したように人間諸科学と哲学の連携をめざして、現代の身体論の地平を切り開いたメルロ＝ポンティに立ち返りながら、人間諸科学の身体論に総合的な観点をもたらす視点、新しい「身体の哲学」を構築した。またこのような総合的な視点は、新しい「身体の哲学」の構築であるにとどまらず、人間科学の総括とも言うべき新たな「人間学」の創設でもあるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計14件)

- ①松葉祥一、現象学的解釈学による研究方法、こころと文化、(6)2、134-140、2007、査読無
- ②松葉祥一、<肉の共同体>の可能性、思想、1015、85-101、2008、査読無
- ③廣瀬浩司、行為の夢想的発明と「社会的なもの」の知覚——メルロ＝ポンティの制度化の思想、現代思想、(36)16、108-124、2008、査読無
- ④廣瀬浩司、野生の世界の風景と出来事の暴力——メルロ＝ポンティ「受動性の問題」についての講義から、思想、1015、8-27、2008、査読無
- ⑤Hirose, Koji, « La fonction heuristique de la notion philosophique : sur la traduction japonaise de la notion de chair en japonais », *Chiasmi international*, nouvelle série, no.10, pp. 129-137, 2008, 査読無
- ⑥Hirose, Koji, « L'institution spatio-temporelle du corps chez Merleau-Ponty - Violence et fécondité de l'événement », *Alter*, no.16, pp. 171-186, 2008, 査読無
- ⑦村上靖彦、沈黙と回復——メルロ＝ポンティの主体変容論、現代思想、35(16)、168-181、2008、査読無
- ⑧Murakami, Yasuhiko, « Découverte d'autrui chez les autistes et la structuration du sujet - Pour une phénoménologie généalogique », *Annales de Phénoménologie*, 8, pp.163-180, 2009, 査読有
- ⑨Kakuni, Takashi, El cuerpo como condicio'n de la posibilidad de repreentacio'n, *investigaciones fenomenolo'gica*, 2008, volumen extra, pp.291-306.
- ⑩加國尚志、ぼろ布、螺旋、渦巻き——後期メルロ＝ポンティの自然観概説、現代思想、36(16)、125-141、2008、査読無
- ⑪加國尚志、沈黙の詩法——メルロ＝ポンティにおける「沈黙」のモチーフ、思想、28-46、2008、査読無
- ⑫加國尚志、見えないもの、隠れたもの——後期メルロ＝ポンティにおけるハイデガー読解をめぐって、アルケー、16、40-53、2008、査読無
- ⑬加國尚志、「流入」概念とメルロ＝ポンティの哲学、立命館文学、603、421-435、2008、査読無
- ⑭加國尚志、彼に触れないこと、メルロ＝ポンティ——デリダのメルロ＝ポンティ読解をめぐって、メルロ＝ポンティ研究、11、59-75、2007、査読無

[学会発表] (計11件)

- ①Matsuba, Shoichi, « Possibilité de la <

communauté charnelle>>», International research for the construction of a new philosophy of body, the 100th anniversary of Merleau-Ponty, Nov. 2008, Rikkyo Univ, Tokyo.

② Kono, Tetsuya, « Qu'y a-t-il dans le cerveau? Philosophie du mental écologique », *Être vers la vie*, Colloque à Cerisy-la-Salle, le 26 aout 2008, Cerisy-la-Salle.

③ 廣瀬浩司, メルロ＝ポンティの制度化概念とその射程、多文化精神医学会学術大会、2009年3月27日、川崎市産業振興会館。

④ Hirose, Koji, « L'institution historique et la perception de l'histoire », International research for the construction of a new philosophy of body, the 100th anniversary of Merleau-Ponty, Nov. 2008, Rikkyo Univ., Tokyo.

⑤ Hirose, Koji, « L'institution spatio-temporelle du corps chez Merleau-Ponty », colloque international "Merleau-Ponty. L'espace et le temps", le 6 juin 2008, Ecole Normale Supérieure, Paris.

⑥ 加國尚志, 私は今ここで、あそこにいる——メルロ＝ポンティの身体論と空間論、第8回河合臨床哲学シンポジウム「空間—開けとひずみ」、2008年12月27日、国立博物館、東京

⑦ 加國尚志, 見えないもの、隠れたもの——後期メルロ＝ポンティにおけるハイデガー読解をめぐって、関西哲学会第60回大会2007年10月14日、徳島大学、徳島

⑧ 加國尚志, 表象の彼方の身体——メルロ＝ポンティにおける絵画と身体の理論、メルロ＝ポンティ生誕100年記念国際シンポジウム「新たなる身体の哲学の構築に向けて——メルロ＝ポンティ生誕100年に際して」、2008年11月22日、立教大学、東京

⑨ 本郷均, 作品／問題の場、メルロ＝ポンティシンポジウム、2007年9月17日、玉川大学、東京。

⑩ Murakami, Yasuhiko, "We did not know what happened to us" - A Phenomenology of Reality, Annual Meeting in the Nordic Association of Phenomenology, April 27 2008, Vytautas Magnus University, Kaunas.

⑪ Murakami, Yasuhiko, "The Phase of affection, the Sphere of Apparition - Fundament for the phenomenological psychopathology", Colloque "Ontology and Phenomenology", July 5 2008, Keio Univ., Tokyo.

〔図書〕 (計9件)

① Matsuba, Shoichi, "From Miscarried Phenomenology to Intuitive Ontology: Merleau-Ponty's Reading of Bergson", *Phenomenology 2005 vol.1: Selected Essays*

from Asia, Cheung Chan-Fai & Yu Chung-chi (eds.), Zeta Books, Bucharest, 2007.

② 松葉祥一, 制度化する知——メルロ＝ポンティの構造主義批判, 岩波講座哲学 4, 岩波書店, 141-158, 2008

③ 河野哲也, 脳から身体・環境へ、岩波哲学講座 5、岩波書店、85-105、2008

④ 河野哲也, 善悪は実在するか——アフォーダンスの倫理学、講談社メチエ、2007

⑤ 河野哲也, アフォーダンス・創発性・下方因果、河野哲也・染谷昌義・齋藤暢人編、環境のオントロジー、春秋社、213-240、2008

⑥ 加國尚志, メルロ＝ポンティ、哲学の歴史 12、中央公論新社、375-45、2008

⑦ 廣瀬浩司, 鏡像のメタモルフォーズと纏う身体の行為論--メルロ＝ポンティ、ラカン、ドゥルーズの絵画論の射程、大宮勘一郎・神尾達之・嶋田由紀・廣瀬浩司・前田良三・柳橋大輔著、纏う--表層の戯れの彼方に、水声社、51-91、2007

⑧ Murakami, Yasuhiko, « Association pour la promotion de la phénoménologie », *Hyperbole - Pour une psychopathologie levinassienne*, 2008, 115p.

⑨ 村上靖彦, 自閉症の現象学, 勁草書房, 2008, 247p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松葉 祥一 (MATSUBA SHOICHI) 神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00295768

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

河野 哲也 (KONO TETSUYA) 立教大学・教育学部・教授

研究者番号：60384715

廣瀬 浩司 (HIROSE KOJI) 筑波大学・文学部・准教授

研究者番号：90262089

村上 靖彦 (MURAKAMI YASUHIKO) 大阪大学・人間科学部・准教授

研究者番号：30328679

本郷 均 (HONGO HITOSHI) 東京電機大学・工学部・准教授

研究者番号：00229246

加國 尚志 (KAKUNI TAKASHI) 立命館大学・文学部・教授

研究者番号：90351311